

初めてタイを訪れたのは一九八七年のことだった。何の予備知識もなく、たまたま会社の団体旅行で訪れたその国は、いきなり私の心をとらえてしまった。

なんだかとても懐かしいところに帰ってきたという感じ。ホテルから出てまちを歩いていると、子どもの頃の自分がそのまま、子どもの頃の下町を歩いているような気持ちになった。猛暑の中を、ゆったりとした時間が流れている国。貧しいけれど、人懐こい笑顔が輝いている人たち。

初めて訪れたタイにすっかり魅せられてしまった私は、帰国後、タイに関する本を読み漁った。さらに、タイ語を学ぶことによってタイの国と文化への理解を深めようと決心し、四十の手習いでタイ語の勉強を始めることにした。

そのタイ語の先生として出会ったのがポーンチャイさんだった。文部省招聘の留学生として、大阪大学工学部で電子工学を学ぶ若者だった。

私はY M C Aのタイ語教室に通いながら、それとは別に、週に一度留学生会館に出向いて彼の個人レッスンを受けたのだった。

レッスンを始めて一年ほど経ったある日、ポーンチャイさんは、

「今度から、これをやりましょう」

と、一冊のタイ語の小説を取り出して言った。そして、これがどういう小説であるかを説明してくれた。

一九七三年から七六年にかけて、タイでは二度にわたって民主化を求める学生を主体とした反政府運動の盛り上がりがあり、軍・警察の弾圧によって多数の死傷者を出す事態にまで立ち至った。政府の弾圧を逃れて国境の森にこもった若者たちもいた。こうしたタイの現代史の一面については、私もこれまでいろんな書物で読んでいた。

この小説は、その当時に学生であった作者が自分たちの世代の経験をもとに書いた小説で、映画化もされた。

「ウアン、エーク、チャイという三人組の男の子が主人公で、仲間にはポムというおてんばの女の子もいて、彼らの学生時代の様子がよく描かれている」というのがポーンチャイさんの説明だった。

小説のタイトルは、日本語に直訳すれば『瓶の中の時間』。

物語の中にテーマソングのようにして出てくる歌のタイトルが「瓶の中の時間」というアメリカの歌で、これがそのまま小説の題名になっているのだ。

本は、ポーンチャイさんが後輩の留学生から借りたもので、私はその本を借りて帰って、何章分かをとりあえずコピーした。コピーは、書き込みができるように拡大サイズでとった。その拡大コピーの一章分数枚を仕事用の鞆の中に入れて、電車の中で読んだり、家で辞書を引いたりという生活が始まった。

小説は、ウアンという名の主人公の「僕」が、道端の喫茶店から流れてくる「瓶の中の時間」の曲に、何年ぶりかで出くわして足を止めるところから始まる。懐かしい曲に誘われて、「僕」は、この曲に包まれるようにして暮らしていた高校時代の生活のことを思い出す。それが小説の始まりだ。

子どもの頃からいつも一緒に行動してきた二人の幼なじみのこと。そこに新たに仲間入りしてきた男勝りの女友達のこと。この仲間とは別に、淡い恋心のような特別な感情を持ってつき合い始めた上級生の金持ちの女友達のこと。離婚しないままに別居している両親のこと。母親と妹と三人で暮らす日々の家庭生活。家を出て別の女性と暮らしている父親のこと。

そうしたあれこれの中で、喜んだり傷ついたりしながら暮らす感受性豊かな高校生の日常生活が、時間を経てからの回想として描かれていく。

私は、辞書をひいては、拡大コピーの行間や余白に新しい単語の意味を書き付け、毎日の電車の行き帰りに何度も何度もそのコピーを読み返した。ある程度まで意味がつかめると、仕事で使っているワープロを使って、日本語に訳していった。

レッスンの日には、ワープロから打ち出した日本語訳の原稿を持参して、ポーンチャイさんと一緒にタイ語の本文を読みながら、私の訳したそのワープロ原稿を訂正していった。そして、レッスンが終わった部分は、早速ワープロの日本語原稿を修正して、決定稿にしていった。

こうした作業を重ねているうちに、タイ語のレッスンそのものとは別に、私には「翻訳」という作業がとて面白いものになってきた。タイ語の本文はそれなりに意味と内容が理解できたとして、さて、それを日本語の小説としては、どういう文体で、どういう文章に置き換えればいいのか。これはもう、タイ語の勉強というよりは、日本語のレッスンと言ふべきものだった。

その後、ポーンチャイさんはタイのお姉さんに頼んで『瓶の中の時間』の新しい本を送

ってもらった。そして私に贈ってくれる本の見返しに、

「藤野サンへ。願ワクバ、勉強ノ志ヲ立テラレンコトヲ！ 速ヤカニ翻訳ヲ完了シ、藤野  
訳ノ出版ガデキマスヨウニ」

と、美しいタイ語で書いてくれた。

この小説に取りかかった最初るとき、ポーンチャイさんは、

「僕がタイに帰るまでに、最後までやりましょう」

と言ったのだったけれど、それは無謀な計画だということがすぐにわかった。なにしろ、タイ語のおぼつかない私が、普通のタイの現代小説を週に一度のレッスンの教材として読んでいくのであつてみれば、私の「翻訳」の作業が、そうはかどるはずはなかった。全部で四十四章からなるこの小説の第一章をやり終えるのに、一カ月以上かかった。

二人がこの小説を読んでいることは、ほかのタイ人留学生たちの間でも話題になった。

みんなこの小説は読んでいるようだった。留学生会館の食堂で、

「瓶ノ中ノ時間ハ、進ンデイマスカ？」

と、女の子からタイ語で聞かれたりした。

ポーンチャイさんが大学院をめでたく修了してタイに帰国したとき、私たちの『瓶の中の時間』は、まだ第四章の途中という状態だった。

その後は彼の後輩、経済学部のエ君が先生役を引き継いでくれた。二年後E君が帰国した後は、工学部で学ぶ才媛Tさん。彼女が帰国した後は経済学部博士課程で将来が囑望されているW君が先生を引き受けてくれた。結局最後まで訳し終えるのに九年もかかったのだった。

以来十年。今日では、四代にわたる私の先生たちは、良き夫、良き父、良き妻、良きビジネスマン、良き学者…として、それぞれタイ社会で活躍している。タイの現代文学を代表する作家プラパツソン・セーウィクン氏がこの小説を発表してからも、すでに四半世紀がたっている。

二〇〇一年三月、私はバンコクでのポーンチャイさんの結婚式に参列する機会に恵まれた。その折、ポーンチャイさんはあれこれ手だてを尽くして、『瓶の中の時間』の作者夫妻にお目にかかるという夢のような機会を作ってくれたのだった。思いもかけなかったお二人との出会いに感激して挨拶の途中で思わず泣き出してしまった私を、ご夫妻は少し困惑しつつも、温かい微笑みで優しく包みこんで下さったのだった。